

八王子の民俗ノート No.5

新たな地区の民俗調査を開始しました

市内の小宮地区、横山地区、元八王子地区、川口地区、由井地区の民俗調査を開始しました。この調査は、平成 28 年度刊行予定の、『新八王子市史 民俗編』の執筆で活用するためのものです。市史編さん室で依頼した三代綾(みしろ あや) 専門調査員と、波田尚大(はだ なおひろ) 専門調査員の2名が調査を行います。何とぞよろしく願いいたします。なお、参考のため、以下に各地区の現在の町名・人口、江戸時代末の村名・軒数・石高、小字・小名などを一覧で示しました。(以下の一覧は、光石千恵子『江戸時代の八王子の人口』かたくら書店 昭和 62 年、『八王子市史 附編』昭和 43 年を使わせていただきました)

1 小宮地区 〈町人口は、『八王子市の人口統計』町丁別世帯数及び人口報告表(平成 26 年 4 月末日現在)による〉

No.	現在(平成 26 年人口)	江戸時代	小字 小名(新編武蔵国風土記稿)
1	大和田町 1~7 (16,182 人)	大和田村 63 軒 371 石 8 斗 1 升 (上大和田村 54 軒、下大和田村 9 軒)	(小字) 上宅地前 婦台 堰口 山根通 上川原 大和田通り 通り宅地添 下和田 赤はけ 高倉原 北高倉原 南原 山ノ上 大道北 北原 安土 中原 宅地通 石川道 山王 上山ノ上 (小名) 安土
2	大谷町 (3,609 人)	大谷村 42 軒 328 石 9 斗 2 升	(小字) 大谷沢 仲田 春日台 旭出口 大杉谷戸 桜並 花田原 鴨山 元原通 (小名) 原大谷 後大谷
3	宇津木町 (3,401 人)	宇津木村 52 軒 300 石 5 斗	(小字) 青木 美根 中村 向原 栃谷戸 権水 大室 久保 山西 後ノ谷津 谷津 久保山 峰裏 中村裏 青木裏 (小名) 中村 青木 久保山 大室
4	石川町 (10,817 人)	石川村 125 軒 523 石	(小字) 谷ツ向 高倉野東 大原 桜塚 塚場 中原 頭無 宮下 田島 中坂 鶴見 上郷 前原 朝倉野 桑原 上ノ原 鶴巻 西野 天野 高倉野西 (小名) 日向 宮田 向い 藤ノ木 天竺田 御嶽下
5	小宮町 (5,334 人)	栗須村 51 軒 309 石 9 斗 8 升	(小字) 中道通上 東光寺下南 八石下 下川原 川原田 中道通中 中道通下 八ヶ上東 八ヶ上西 谷田 東光寺下北 (小名) 下河原 四ツ谷
6	平町 (385 人)	平村 15 軒 43 石 4 斗	(小字) 旭耕地 宮前 西山 峰入 中尾根 東山 下川原 打越 (小名) 峰 西玉 歳ノ神坂 割滑 穴澤 澤口 井戸窪 宮ノ前
7	中野町 暁町 1~3 中野山王 1~3 中野上町 1~5 (24,766 人)	中野村 86 軒 683 石 6 斗 4 升 (西中野村)	(小字) ひよどり山 根付屋敷通 柳橋 金子田 山王林(山王社) 津久田 仲田 甲ノ原 清水 上屋敷通 原屋敷通 前田 西前田 (小名) 上中野 清水 下中野 山王森 安土 原中野 中島

○富士見町 1,448 人(上大和田村・大谷村) ○久保山町 1・2 5,445 人(石川村・宇津木村・平村・栗須村)

○丸山町 1,232 人(横山村・平村) ○高倉町 3,304 人(栗須新田・日野本郷新田)

2 横山地区

No.	現在 (平成 26 年人口)	江戸時代	小字 小名 (新編武蔵国風土記稿)
1	散田町 1~5 (13,854 人)	散田村 137 軒 613 石 9 斗 1 升 2 合	(小字) 新地 寺上 中散田 下散田 山田 (小名) 新地 かたそ ほうで 正ノ目 山田 上ノかいと 椿の下 御日ノ木かいと 散田
2	柵田町 (8,834 人)	下柵田村 65 軒 467 石	(小字) 狭間 二軒在家 大巻 (小名) 大牧 二軒在家 狭間
3	館町 (12,438 人)	館村 100 軒 467 石	(小字) 古歌場 四ツ谷 和田 日向田中 日影田中 殿入
4	寺田町 (6,724 人)	寺田村 56 軒 156 石 1 斗 4 升 4 合	(小字) 上寺田 中寺田 下寺田 (小名) 台屋 西在家 金山 内手 小金沢
5	大船町 (2,056 人)	大船村 46 軒 115 石 4 斗 4 升	(小字) 上 中居 下
6	長房町 (14,057 人)	下長房村 106 軒 358 石 9 斗 3 升 8 合	(小字) 中郷 三間在家 船田 水崎 十里 (とどり)

○並木町 3,389 人 (散田村新地) ○山田町 2,639 人 (散田村山田 山田村)

○狭間町 6,466 人 (下柵田村狭間) ○めじろ台 1~4 8,408 人 (山田村)

○廿里 (とどり) 町 702 人 (下長房村十里 (とどり))

3 元八王子地区

No.	現在 (平成 26 年人口)	江戸時代	小名 (新編武蔵国風土記稿)
1	元八王子町 1~3 (11,946 人)	元八王子村 230 軒 419 石 3 斗 8 升	(小名) 瀧原 八幡宿 中井 峯ヶ谷 道場根 原ヶ谷 鍛冶屋村 河原ヶ谷 鳥居場 内出 前村 五霊谷 中宿 梶原谷
2	大楽寺町 (5,545 人) 叶谷町 (1,851 人)	大楽寺村 60 軒 128 石 5 斗 2 升	(小名) 千本木 叶谷 関口 神戸 (ごうど)
3	横川村 (11,250 人)	横川村 90 軒 281 石 9 斗 8 升 7 合	(小名) 瀧原 五段田 六所 塚戸 左京内手 下原 柿ヶ谷 上内手 坂下 塚場 八割 原 谷戸 樋ノ口 清水
4	上壱分方町 (3,693 人)	上一分方村 4 6 軒 196 石 8 斗	(小名) 和田 大柳
5	諏訪町 (5,279 人) 四谷町 (2,745 人) 泉町 (3,524 人)	下一分方村 160 軒 196 石 8 斗	(小名) 四ッ谷 諏訪宿
6	貳分方町 (4,449 人)	二分方村 76 軒 303 石 5 斗 3 升	(小名) 由井野 神戸 (ごうど) 柳沢 藤ノ木
7	川町 (2,487 人)	川村 35 軒 100 石 7 斗 6 升	(小名) 橋通り 大澤 北澤 大縄琵琶ヶ谷 上元谷 (しょうげんやつ) 藤右衛門谷

○城山手 1~2 (長房町・元八王子 2 丁目) 2,006 人

4 川口地区

No.	現在（平成26年度人口）	江戸時代	小名（新編武蔵国風土記稿）
1	上川町 (1,673人)	上川口村 160軒 622石	(小名) 唐松 調江 宮田 十二社 別所 滝之澤 堀口 北之根 道場 片井戸 宮ヶ谷戸 影澤 十内入 釜之澤 黒澤 戸澤 日影
2	川口町 (12,406人)	下川口村 170軒 585石5斗2升	森下 日向 関場 田守 佐入 半頭 久保 日向ヶ谷戸 麴谷 豊ヶ原
3	犬目町 (6,462人)	犬目村 93軒 410石3斗7升	(小名) 山王下 殿ヶ谷 兜ノ原 井戸尻 堂ノ下 川原
4	檜原町 (8,626人)	檜原村 46軒 293石7斗3合	(小名) 本村 新井 佐貫 一本松
5	美山町 (2,912人)	山入村 80軒 302石7斗3升	(小名) 【上郷】瀬東 南 中井 長久保 遠野谷 鹿子澤 栗原 【下郷】縄切 萩園 御屋敷 馬込 馬継

○清川町 1,339人（檜原町 檜原村）

5 由井地区

No.	現在（平成26年人口）	江戸時代	小名（新編武蔵国風土記稿）
1	北野町 (7,589人)	北野村 75軒 371石3升	(小名) 七日市場 和田
2	打越町 (9,356人)	打越村 63軒 272石6斗5升3合	(小名) 土入 中谷戸 大畑 日向
3	長沼町 (7,875人)	長沼村 53軒 145石4斗5升4合	(小名) 大矢部 山下 殿谷戸 中谷戸 両田
4	小比企町 (6,680人)	小比企村 140軒 513石6斗1升	(小名) 上組 中組 杵ノ下 坂下 中居 竹ノ内 時田 長作 江田原
5	片倉町 (12,639人) 西片倉町1～3 (2,481人)	片倉村 160軒 337石62町1反5畝	(小名) 川窪 日向 只沼 時田 釜貫 車石 墓
6	宇津貫町 (72人) みなみ野1～6 (9,807人) 兵衛1・2 (2,199人) 七国1～6 (9,040人)	宇津貫村 80軒 194石5斗6升	(小名) 綿打谷戸 芝ノ上 勝負谷戸 宮田 君田 下谷戸 閑道谷戸 中村 堂ノ上

○北野台1～5 7,334人（中山・鎌水・片倉町・打越町の一部と高嶺町）

○絹ヶ丘1～3 6,128人（打越町・高嶺町・長沼町・下柚木・中山の各一部）

石川町の立川秋雄氏聞き書き（小宮地区）

1 話者に関すること

立川秋雄家のことなど 武田信虎の家臣である三枝氏が、あきる野から日野、そして小宮へと移動したことに始まる。立川正之さん（故人）、勇さん、愛治さん（故人）は立川秋雄家とイッケである。

昭和11年生まれの立川秋雄さんは、26歳の昭和38年1月15日に市内明神町の子安神社で結婚式を挙げた。当時、自宅ではなく結婚式場で式を挙げるのは珍しかった。結婚式の当日は神社での式の前後に自宅に仲人や組合の人たちを呼んで飲食をした。奥様は昭和13年生まれで、日野の豊田からお嫁に来た。両方で仲人をたて、仲人のことをオヤブンといった。

立川秋雄家はシntax（新宅）に出た家なので、クミアイ（組合）に加入するには経過を要し、仲人が口をきいてくれて入ることができた。

実家（立川愛治家）から出て独立して所帯を持ち、居宅は畑のあったところに建築した。

豆腐店を営む 学校を出て立川秋雄氏が就職するころは、近くの大きな会社でも不景気で就職難で、なかなか縁故がないと会社には入れないという話であった。立川市内のあるモータースで自動車修理工として勤務した。そのころは、自転車で自宅から小宮に出て多摩川の築地（ついじ）の渡しを使って通った。立川まででは通勤に時間がかかるので、その後、市内大和田町で働いた。

独立して自分で何か商売をしたいと考え、最初は蕎麦屋を考えたが、他の人が嫌がる仕事をやってみようと思った。冬の寒い時期でも早朝からの水仕事で大変な豆腐店を考えた。そこで、調布市の豆腐店で修業した。深夜の11時か12時ころにオートバイで家を出て調布まで通い、仕事は午前3時とか4時の早朝からとりかかった。まず火の付け方から教わり、なかなか肝心のニガリの分量などは教えてもらえなかった。仕事を見て覚えようとしたが、見る機会もあまりなかった。豆腐づくりの大事なところは簡単には教えてもらえなかった。一通り豆腐作りを覚えるまでには3年かかるといわれたが、自分で仕込みからすべてを試みるなど、工夫して自分は早く覚えた。

調布での仕事は、豆腐作りではなくまずは行商を主にやった。当時の売値は、豆腐25円、油揚げ8円であった。

そうして、家族の反対もあったが、姉の理解もあり昭和42年の夏に自分で豆腐店をはじめた。場所は現在の家の隣で、息子さんが住んでいる場所である。15尺から16尺の深さの井戸を掘った。仕事用に二か所に井戸を掘った。綺麗な砂利が出た方の井戸は澄んだ水が出て、飲用にも適した。良い水が出て、豆腐づくりに使用した。もう一つの井戸は水が濁るので使えなかった。その後、水道を引いてもらいたいと思い、地域の方々が動いて実現した。

朝に豆腐を作り、3時ころから3時間くらい、宇津木や大谷などを回って販売に歩いた。近所に先行する地元の豆腐店があったので、販売の範囲が重ならないよう努力し、販売方法を変えて、八百屋さんなどの店舗に豆腐をおいてもらって販売する努力をした。豆腐店の経営は5年くらいで軌道にのった。学校給食に豆腐を卸すようになった。「立川屋とうふ店」の豆腐の特徴は、絹と木綿の中間のような豆腐が良く売れた。大豆を煮る釜をニガマといい、ボイラーを使った。日常生活の風呂などの燃料は、薪を購入し、台所はプロパンガスを使用した。

地域の歴史への関心 平成2年(1990)に石川町会の会報「いしかわ」が発刊された。次第に新しい町会会員が増え、平成18年(2006)の広報でアンケートをとると「石川町の成立」などを知りたいという多数の意見が寄せられた。そこで、立川さんが広報担当の一員となったおり、立川さんが「石川歴史の会」を主宰していた関係もあって歴史担当となった。そして、実際の記事は文章を立川秋雄さんが、図版などを黒川健次さんが担当して「歴史探訪」という題で会報に連載することになり、平成19年(2007)4月15日発行の「いしかわ」第69号に初回を掲載し、全19回、5年間連載した。

「石川歴史の会」は、10年前くらいに石川町会内の人たちで結成し、最初は14人ではじめた。年間4回から5回の八王子周辺の史跡巡りを行い、会員は28名になった。会活動での成果や連載記事をもとに、立川秋雄さんが自費で黒川健次さんの編集で、『古甲州道入口石川町を中心とした石川周辺の歴史』(平成22年9月発行 A5判63頁)と、『石川歴史探訪その二 古里をたずねて』(平成25年3月 A5判71頁)にまとめている。

2 地域の民俗

(1) 社会生活

御嶽神社 祭礼は古くは中の九日に行われ、現在は9日以降で9日に近い土・日に行われる。平成26年の祭礼は9月13日(土)と14日(日)である。祭礼では、西蓮寺と御嶽神社で石川の龍頭舞保存会によって、獅子舞が行われる。獅子舞は夕方6時ころからはじめて、12時ころまで行った。また、この祭りには露天商が多くのお店を出し、焼き鳥屋の店が売り上げの多かった時がある。参拝者は多い。

新旧の家々があり、神社の氏子範囲を明確に示すことはなかなか困難である。昔から地域にある家は氏子で、そうした家では祭礼の時に、以前は家ごとに区分された寄付をした。

神社の役員は年番といって9人いる。町会の三地区から3名ずつ選ばれる。その年番は神社の掃除を毎月交替で行う。祭礼の前や正月の準備では、役員全員が行う。

元旦には神官が来て、新年の顔合わせを行う。9月の祭礼では、獅子舞が舞われる。

町会 現在の石川町会の地区割りは、北方、南方、宮田方の第一地区、中坂方、向方、石川西の第二地区、田島方、日向方、石川東、日向方東、日向方南の第三地区の三つの地区に分かれている。

中坂(なかさか) 講中 立川秋雄氏の住むところの講中は中坂講中で、現在の町会では第二地区にはいる。かつては20軒くらいの軒数で中坂(なかさか)講中といい、三組に分かれている。クミ(組)はクミアイともいい、7~8軒で構成されている。それぞれのクミには特に名称はないが、立川姓や内田姓、金子姓などがそれぞれの組に集住している。新しい家で、何年も経過すれば、酒一升を買ってクミアイに入ることもできた。クミアイの者は、同じクミアイで結婚式があれば夫婦で出席した。新しい家はクミアイには入れるが、講中には入れない場合があった。

ワングラ 中坂講中では、現在の交番があるところに、立川良作家の土地を借りてワングラ(椀倉)を所有していた。ワングラには、座布団、膳、椀、箸、うどんを入れるキリダメ、チャボ台、薬缶、土瓶、銚子などを収納していた。このワングラは20~30年前に廃止した。

共有地か 明治から大正のころに伝染病が流行し、八王子市の要請で桜塚に伝染病院が設置された。昭和4年に、八王子市立台町病院ができると、桜塚病院は廃止された。この伝染病院の用地は共有地か寺の土地だったかもしれない。病院を取り壊すのは、町会の人々が行った。

藤の木 藤の木という場所には大きな藤の木があって、地域の目印になっていた。そこには、藤の木地蔵と、立川周蔵外25名所有の共同墓地がある。

天竺田 北側に山を背負い、その麓に湧水があり、その湧水は日照りにも枯れずこの水を飲むと体に良いといわれている。天竺田で栽培された米は美味で食すと老人も元気になり、天竺田とか養老田という。

六反田 湧水が多く、この水田で収穫された米は美味しいという。養蚕が盛んなころには、六反田に共同の繭の乾燥場をつくった。昭和30年代までは稲作が盛んであったが、谷地川が大きく蛇行していたので、昭和50年に大規模な河川改修が行われた。現在は、八王子市役所の石川事務所や石川市民センターがある。

シンデンパラ (新田原) 草の捨て場で、シンデンパラというところが高倉にあった。

シモツパラ 母親は、石川内のシモツパラから嫁に来た。

コバタケ 高倉の近くの畑の名。

クワバラ 八高線の近くの畑の名。

ツルマキ 向方(むかいかた)にあった水田の名。

地名に「方」がつく 旧石川村や旧栗須村では、上方、下方、北方、南方、中坂方、田島方、日向方などと、「方」を付ける地名が多い。

築地の渡し(ついじのわたし) 昭和27年ころには、まだ渡しがあった。多摩川は今と違って水量は多く、たびたび小宮では堤防が決壊したことがある。渡しにはロープを対岸まで通して、船を通した。大雨だと渡しの船が流されてしまうので渡しは不可能で、上流の拝島橋を渡らなければならなかった。築地の渡しは、福島和助氏がやっていた。

(2) 農業生産

桑畑 現在の立川秋雄家周辺は、桑畑が広がっていた。

干し柿 石川地区では渋柿はたくさん植えてあり、10月下旬から11月初旬までが収穫期であった。干し柿は正月の御馳走だった。青年団で各家を訪問して夜の10時ころまで渋柿の皮を剥いた。柿剥き専用の剃刀のような形状の刃物があった。柿は柿の後ろからぐっとやって剥く。渋柿を干すには篠竹を横串にし、横に7つくらいの柿を刺し、それを縦に10本縄でつないで編み、軒先に掛けて約3週間程度干す。

柿渋 横溝さんというお宅の屋号はシブヤ(渋屋)という。柿の木が100本くらいあって、3~4代前から昭和22~23年ころまで柿渋の製造を行っていた。

9月上旬ころに柿を収穫し、厚い板の上で柿を小槌でつぶし、水を入れた大きな桶に入れる。渋の水を甕に入れて発酵させて、熟成させて保存する。柿渋は、防水、防腐剤として使われ、板塀への塗布、番傘、団扇、漁網などに使われた。多摩川で使う、投網の防腐剤にも使ったりした。

大根 昼間に鮫皮を使って大根を洗い、8畳間の畳を上げてそこで8~10本編み、明朝干して夕方には家の中に入れ、乾いた大根を一連につくる。鮫皮で大根の表面をザラザラにしたほうが、乾燥には良い。12月いっぱい作業する。沢庵にして、オート三輪に積む。淀橋(新宿)の市場に出荷すると結構売れた。途中、烏山で休んだ。

(3) 衣食

衣服 お母さんのころ女性は、コシマキを付けていた。男は、モモヒキをはいていた。

主食 押麦で、黒かった。サツマイモをふかしたものもあった。

糸取り お母さんは、繭から糸をとって、手機で布を織った。

米と麦 7:3 である。奥様の実家のある日野の豊田は水田が多く昭和 27~28 年には白米になっていた。立川秋雄さんは、豊田では米でも、そのころはこの辺りでは麦と白米であったという。米は朝晩炊き、すえてしまったら水を入れておかゆで食べた。オシムギを加えた飯でつくったおにぎりは、粘り気がなくおにぎりにならなかった。弁当は、白米を多くおのせて少しでも見栄えを良くした。米と麦を混ぜるだけではなく、麦を布巾に入れて分けて炊くこともあった。普段は麦 7 に米 3 だが、弁当の時には麦 5、米 5 の半々で炊いた。

うどん 晩ご飯に食べていた。

オチャ 午前 10 時ころをオチャといい軽いものを食べ、午後 3 時ころにはサトイモやサツマイモを食べた。

干し柿 干し柿はお正月の御馳走であった。

ニワトリ 鶏を数羽飼っていて、時には殺して肉をヤシヨク（夜食）の鍋に入れる。煮団子に餡子をいれたものを食べた。

養蚕と民家 山岸は湿気てしまうので、立川勇家は山岸から前方に家を出した。家を出したところは、以前はクワバヤシ（桑畑）であった。

（4）年中行事

オカマジメ 暮れのオカマジメは、明神町の子安神社でもらう。

ドンド焼き 近年、市民センターの行事で行う。田島橋の下でお飾りを燃やす。以前は各家々で行っていた。梅の木に繭玉をさして飾った。

稲荷講 中坂講中の立川姓で、稲荷講を行っている。稲荷は本家の立川愛治家の裏の山に祀られ、立川姓の濃い親族たちの 5~6 軒で集まる。稲荷の祠の前で火を焚き、メザシを焼いた。各家で煮物を持ち寄り飲酒する。

土用の日 土用の日には、庭を掘ったら悪いことが起こる。

水神様 ミズガミサマは井戸の神である。井戸は、昔は釣瓶、立川秋雄氏のところは手押しポンプである。井戸屋も近くにおり、埋まったら浚う時に呼ぶ。

エビス講 1 月 20 日と 10 月 20 日に祭りを行う。お金を枡に入れて供える。魚のお頭つきを供える。

（5）人生儀礼

サンバ 左入に産婆さんがいた。昭和 26 年頃、出産は自宅に産婆さんと呼んで行った。昭和 39 年頃には、病院で出産した。

オシチャ オムツを頭に乘せて、井戸と便所に線香を供えて、母親ではなく組合の婦人に巡ってもらう。

七五三 御嶽神社にお参りする。組合の方に頼んで、お参りする。

ハシカケ 立川秋雄さんが結婚するときには、奥様の親戚の方がハシカケをした。

仲人 仲人は親戚の濃い人、本家の親しい人、本家の指示でお願いした人などが仲人になった。その仲人を結婚した者たちはオヤブンと呼び、盆暮の品を届ける。

結婚のこと 石川に嫁に来たら、病気になっても休むこともできないようだった。明治時代は、それほど農作業などの暮らしがきびしかったという。石川から嫁を迎える相手方には歓迎されたという。

結婚式では、家に入るときに火をまたいでお勝手口から入った。

葬式 昭和 43 年くらいの葬儀が、最初の火葬であった。墓穴掘りは、ロクドバンといって、4 名出て晒を 4 人で分け、山の上までリヤカーで行った。石川の家々は、西蓮寺の檀家である。

墓 立川秋雄家の墓は、西蓮寺の裏山にある。藤の木の共同墓地に墓を持つ家もある。

(6) 信仰

熊野速玉神社 現在は御嶽神社境内で祀られているが、以前は天竺田にあった。

日向講中 日向講中の旦那寺は、ほぼ円通寺である。

念仏講 念仏講は4月8日の釈迦念仏と、春・秋の彼岸のお中日念仏で、講中で年3回行った。宿は持ち回りで、その宿の座敷で、念仏を唱えながら大きな輪になった数珠をみんなで繰る。男の念仏は葬式が全部すんでから行う。男の念仏では十三仏のみ唱えた。年忌の供養で念仏を頼む家もあった。

お日待ち 講中でお日待ちは年1回開かれ、宿になった家が、茶菓子などを出した。新たに嫁入りしたお嫁さんが、その場で紹介されることがあった。そのとき、嫁さんが茶菓子を持参する。

不動講 中坂講中には、不動講、御嶽講、榛名講などの代参講があった。不動講は現在、年二回行っている。不動が描かれた掛図があって、それを掛けて毎月28日に行っていた。

御嶽講 御嶽講は農家の講である。青梅の御嶽神社への代参は、交代制で3人だった。帰宅後はお札をみんなに配った。現在も何軒かの家が行っている。

榛名講 青梅の御嶽神社に参る以前は、榛名山に参る榛名講があった。これは、ずいぶん早くに無くなった。榛名講で代参に行った折に桜の苗木を持ち帰り、神社の境内に植えたことがある。

○調査経過

調査日：平成26年8月7日 調査地：八王子市石川町

調査者：三代綾、波田尚大、横路真琴、佐藤広

9月11日 波田、佐藤が、立川秋雄氏を再訪した。

12月2日 三代、佐藤が、立川秋雄氏を再訪した。

小宮町の福島忠治氏聞き書き (小宮地区)

1. 話者に関すること

八王子市東北部にある小宮町は、昭和16年10月1日に八王子市に合併するまで、小宮町(明治22年から昭和9年までは小宮村)大字アワノス(栗之須)と云う集落であった。

福島忠治家の本家は福島利秋家で、福島姓は鎌倉時代に埼玉街道に土着したと伝えられている。今も古くからの家の屋号にはケイド(街道)、サカシタ(坂下)、オオセド(大背戸)があり、いずれも高幡山金剛寺(高幡不動)の檀家である。現在小宮町に福島姓が約30軒あるがほとんどが、前述したケイド、サカシタ、オオセドの三軒の分家である。

福島忠治氏は、昭和10年生まれで日野の自動車会社に長い間勤務した。のちに八王子みなみ野の自動車会社の研修施設兼展示施設に勤めた。現在、歴史研究グループの大久保長安の会の副会長である。

2. 地域の民俗

(1) 社会生活

地名 栗之須には、ハチコク(八石)、シタカワラ(下河原)、ヨツヤ(四つ谷)、ウエガタ(上

方) の四つの小字がありました。

八石は、粟之須の西方で、名主関根氏が北条氏に属して二十八石を領していたので最後の2字を戴き付けられた地名である。下河原は、粟之須の北側で日野用水に沿ったところから付けられた地名である。四つ谷は、粟之須の東方で、埼玉街道沿いに四軒の家があった事から付けられた地名である。上方は、粟之須の南方の高地なのでつけられた地名である。

コウジュウ 講中は、八石、下河原、下方(しもがた)、上方と上方から分れた観音組があり、講中が個々に活動した。

その活動は、

- ① 榛名神社、御岳神社等に順番で代表が代参して御札を戴いて帰参した御札を配って、当番の家で御日待を行い家内安全、穀物・野菜の豊作等を祈願すると共に親睦を図った。子供には御菓子等が配布された。裏方は講中の女姓が担当した。

オワグラ お碗倉 各講中で持っており下方の講中のお碗倉は井上肉店の裏にあった。中には座卓、座布団、茶碗、など何でも借りて行事を済ますことができた。

氏子 粟之須の神社は、

- ① 日吉神社 元禄16年(1703)に粟之須村の氏神様として町全体が見渡せる南の丘の上に建立した。土地の人には「おぼすな様」と呼ばれ、生まれた土地の神様として崇拝されている。祭りは、4月と8月にお囃しを奉納する。
- ② 八坂神社 神輿の神社であり、8月に日吉神社と一緒にお祭りを行っている。

寺 如意山寶珠院東福寺 天台宗 本尊阿弥陀如来 阿弥陀三像 開基中興七世榮源法師開創 宝永2年(1705)以前 境内に観音堂・薬師堂があり「観音絵馬」「薬師絵馬」が飾られていた。

観音堂に十一面観音(笛継観音)があり、ご本尊は十一面観音で応永六年(1395)の秋、武蔵野一円に悪疫が大流行した時、帝より関東の鎮護のため京都御所に安置されていた十一面観音を武蔵国につかわされたという。

京都から十一面観音の道案内をしてきたお手引き御地藏さんの話。

笛の名主北条氏照の家臣彦兵衛の秘蔵名笛「大黒」の話。

子授けを願う女衆のための子授け石がある。

観音様の御開帳は60年に一回ある。

子どものころ、4月8日の花まつりに甘茶をかけ、飲ませてもらった。

学校 第八小学校の小宮分校は福島忠治氏が四年生の時、現在の小宮会館の場所にできた。そこは三年生までの就学であり、ゆえに忠治氏は一年生の頃から片道2kmを雨の日も雪の日も歩いて第八小学校に通った。また、戦時中は空襲警報が鳴るとかけて帰った。

(2) 農業生産

現在、農業専門の家は1軒のみという。

小宮の資源 粟之須は東西20町ほど、南北15町ばかりの面積の狭い小村だが戸数は多く、かつては川漁や砂利採取の利潤があって頗る賑わった。農業の規模は小さく、水田は日野用水と多摩川の間であり、全体の4分の1の面積で、小河内ダム(西多摩郡奥多摩町)ができるまでは台風等で洪水が発生し、日野用水の北側は一面多摩川の濁流と化した。

小宮は一般に、収入は多摩川の漁や砂利採取等で日銭が入り、金使いは荒いなどと云われることがある。

(3) 衣食

家屋 古い昔の家は萱葺き屋根が多く、家の北側、西側に大きな檜の木を植えて囲い風を遮るようにしていた。養蚕を行い、蚕を飼うため天井は竹で作られていた。南側に廊下を設け、日向ぼっこでの近所との交流の場としていた。

家への入口は南側にあり、入ると土間で裏口まで抜けることができた。その脇に囲炉裏があり家族団らんのものであり、その先に、竈等料理の場があった。他には、物置、馬小屋があり、小さい時には馬を飼っており運送や、水田の作業に使っていた。他に風呂、トイレが母屋と別にあった。

井戸 家の外に、各家ごとに井戸を掘りつるべで水を汲み上げていた。地下水の流れは非常に良く枯れることはほとんどなかった。小宮町には、井戸を掘る井戸屋がある。

食事 食事の御膳は個人ごとの箱膳で食べ、終わったら綺麗にして戻した。

(4) 年中行事

- ① 暮れの 29 日には餅つきは行わない。
- ② お飾りは一夜飾りしない。
- ③ 晦日に長く生きるように蕎麦を食べる。
- ④ 晦日に蒟蒻を食べて腹の中をきれいにする。
- ⑤ 正月元旦若水を確保する。正月元旦に日の出まいるを行う。
- ⑥ 正月元旦から 3 日まで家長が御勝手を行う。
- ⑦ 正月蔵開き・山開きその他
- ⑧ 御里帰り

⑨ どんど焼 セイノカミで上方と八石の子どもたちが餅を持ちよりやっていた。大谷町の中の一集落では長く行っていた。

石川市民センターが出来た時、福島忠治氏が石川地域住民協議会の総務部長に着任し、どんど焼の実施を提案し復活させた。現在団子は 3,000 個（櫛 1,000 本）を用意し、正月の成人式前後の休日に、田島橋の下で行い、大和田の松宮宮司に御払いして戴いたあと年男・年女の子供が点火し、燃えた火で団子をやいて無病息災（一年間風邪を引かない言い伝え）を願う。

(5) 人生儀礼

宮参り 生まれた時、七五三の祝には赤飯を持って御参りに行き、子供たちが付いて行って赤飯のお裾分けして貰って食べた。

葬式 墓はそれぞれの家が所有するイエバカで、火葬となったのは八王子市の条例で決まったと思う。土葬の際は講中の人先頭で鉦を鳴らし、庭を左まわりに 3 回廻ってイエバカに向かって出棺する。墓から帰ってくると、手を洗い、塩を振りかけ、半紙に描いた臼に座る恰好をしてから家の中に入った。

昔、葬式は、各家で実施した。必要な葬具は、講中でお椀倉を持っていたので借りて実施した。

葬儀での講中の役割、講中の中で仕事を分けて行った。

- ① 喪家の属する班の男衆は、長(おさ)の指示により受付、団子の籠など飾り付け、鉦係、行列係などを担当する。
- ② 喪家の属する班ではない別の班のものが御墓の穴掘りと、棺を埋める作業など担当する。
- ③ 女衆は長(おさ)の指示により御勝手を一手に担当する。家の者や親戚は一切手を出してはいけない。

④ 葬式が終わって御客が帰った後、男衆は墓前で念仏を唱えてから解散する。女衆は御勝手の仕事が全て終わった後で、念仏を唱えてから解散する。

結婚 この辺では昭和 30 年代の初めぐらいまでは、家で結婚式を行った。話者の福島忠治氏は、立川の諏訪神社で近所の人と仕事なかまを招いて結婚式を挙げた。以前は、手伝いを講中で行った。子供は御菓子等を貰えた。外で結婚した場合は、講中の長（おさ）が嫁をつれて近所廻りをした。その他御日待は廻り番で個人の家で行う。

廻り観音 昭和 20 年頃（戦前）まで行っていた。石川のどこかの家から、厨子に入った観音さまが本家の福島家に来た。3日ぐらいの間安置し、講中の女性が念仏を唱えた。忠治氏は障子の裏で念仏を子どもながら唱えていた。また子どもは、字が上手になるように習字を供えた。その後、日野の東光寺に忠治氏の父親が観音様の厨子を背負って行った。

○調査経過

調査日：平成 26 年 8 月 21 日 調査者：三代綾、佐藤広

10 月中旬に、話者の福島忠治氏に手を加えていただいた。

12 月 2 日、三代、佐藤が再訪した。

※立川秋雄氏、福島忠治氏の聞き書きの掲載順は、調査日の順とした。内容は、民俗部会で設定した調査項目に基づいて調査者がインタビューを行い、事務局で書きおこし、それぞれの話者に確認をしていただいたものである。

話者の方々の御承諾をいただいてここに掲載したが、話者にとってはこの内容は不十分なものであるかもしれない。新たに調査をスタートさせた地区の民俗の記録として、より多くの市民の皆様を知っていただきたく掲載させていただいた。大方のご理解をいただきたい。

八王子の酪農〈追記〉

八王子市史「八王子の酪農について」（『八王子の民俗ノート』No1）の註（1）で、井草甫三郎について記載されている文献を紹介した。『八王子市史』については上巻の「本市畜産業の概況」（第 5 章第 2 節 1）を示し、井草甫三郎については触れられていないことを述べた。しかし、『八王子市史』附編の「附記 由木村の変遷」の 79～80 頁に記載されていたのを欠いてしまった。不勉強をお詫びしたい。

「附記 由木村の変遷」78～89 頁（第 1 章合併町村の沿革／第 2 節 4 由木村の編入）は、農業経済の視点から由木村の特質を（一）から（六）まで指摘している。そのうちの（四）が、井草甫三郎についてである。（四）の全文を以下に示す。

（四）当村の農村経営の特異性として乳牛、緬羊などの畜産をあげるべきであろう。先覚者として松木の井草甫三郎氏などを出し、その伝統は今日まで受け継がれている。しかし、この傾向は外国

の歴史に見られるような農地を牧場化するような変化をもたらしたのではなく、家畜飼育を伴った農業経営、という形で当村の農業規模の中に定着したのである。井草氏の構想、発想は、多くの書物に論じているような単に牧畜の奨励ということではなく、明治時代の当地域にさかんであった民権壮士が、政治に熱中するあまり、農業をすて、家産を破り村を離れていく傾向を憂えて、政治と農村を密着させ、農村指導者を育成する、というものであった。他の地域の豪農民権家のように、農業経営を片手間にして「国事」に奔走する、というような環境は、当村のようなところではつくられなかったといえよう。今日ではそのようは先覚者的情熱を受け継ぐとともに、組合組織の結束によって事業を守る時期にある。(佐藤 広)

<民俗部会 新刊：お知らせ> 八王子市史叢書Ⅱ 『聞き書き 織物の技と生業』

A5判 275頁 1,000円

八王子市は江戸時代から桑都そうとという美称を持ち、近現代には織物のまち八王子として全国に名を知られた。そのため織物と市民生活との関係は深い。そこで市民の視点から織物の記録に取り組み、聞き書き調査の成果を多くの市民に知っていただきたい、そんな思いからまとめたのが本書である。これまでの織物研究の多くは経済史の立場からのもので、民俗学の立場からまとめたものは、八王子市で本書が最初である。

第1章「八王子と織物」ではまず八王子織物の歴史を概観し、次に昭和30年に『多摩文化』4号に発表された岸田論文を収め、2章以下の聞き書きの理解を助ける。

第2章「織物の用具」ではモノをあつかい、生糸をとる座繰は八王子産のほか、神奈川県の半原のものもある。八王子の養蚕・製糸の用具が神奈川、山梨、静岡までも販売され、モノから人々の交流が浮かんでくる。経糸を通す箆はは生地や柄と関係があり、難解な技術を図版や写真で説明している。

第3章では、八王子織物を支えた周辺農家の実態を取り上げた。農村での大正・昭和の力織機による工場展開が理解できる。親機と賃機、工場主と織子との記録も貴重である。戦後農村での起業、手織り時代のこと、農村から市街地に出て機屋を経営すること、市街地の機屋へ出て織子として働くことなどにもふれる。第4章では、市街地の機屋と買継商、撚屋、紋屋、振り込み、機織りの用具販売の機料店など、織物関連業をとりあげた。戦後の総合商社と八王子織物との関係もこれまでに取り上げられていない現代史である。第5章は、伝統の多摩織、新しい商品への転換、自社ブランドの商品開発、著名なデザイナーとの連携での国際的な活躍、織物資源を生かした後継者育成への取り組みなど、今日の織物の動向をみることができる。織物の理解のため、動画(DVD)を付している。本書は織物研究の入門書として、読み物としても充分満足いただける。

『聞き書き 織物の技と生業』(1,000円)の販売場所

- 市史編さん室 ○八王子駅南口総合事務所 ○八王子市郷土資料館 ○八王子市役所市政資料室
- くまざわ書店八王子店(旭町) ○石森書店(四谷町) ○磯間書店(千人町)
- ブックランド島村書店(台町)

(2015年1月現在)

〈寄贈 民俗関係図書を紹介〉

『南町山車建造 100 周年記念 祭礼写真集』八王子市南町町会（会長 井上公雄） 2006 年

南町町会は、寛政 3 年（1791）の銘文のある大山信仰の神酒杵（みきわく）や、安政 4 年（1857）の山車人形の岩座を所有している。明治 30 年の八王子大火で山車を消失したが、明治 39 年には山車を再建し山車人形を乗せて曳航していた。しかし、昭和 20 年 8 月の八王子空襲で山車人形「応神天皇」を焼失したが、平成 17 年には山車人形を復元した。本書は、明治 39 年の山車建造から 100 周年を記念して発行されたもの。A4 判、41 頁。

『南町 100 周年記念誌』八王子市南町町会（会長 平澤東） 2012 年

南町は大正元年の町名改正で、横山宿、馬乗宿、八日市宿の一部が南横町と呼ばれていたもので、そこから南町という町会名の町会が成立した。豊富な写真と、昭和 28 年に南町親睦会から発行された『私達の町内一町名の誕生と祭礼』が収められている。A4 判 23 頁。

『中町百周年記念 中町史』八王子市中町町会（会長 小松博明） 2014 年

八王子市の中心市街地に位置する中町町会は、大正元年 10 月 1 日に横山町と馬乗町の一部地域を合わせて新たに誕生した。昭和 27 年には料亭 45 軒・芸妓 215 人が存在した花街であった。こうした歴史をベースに現在もまちづくりが推進されている特色ある町会である。

平成 24 年 10 月 1 日には百周年を迎え、本書を刊行した。本書の構成は、第 1 章歴史 第 2 章町会活動 第 3 章町会行事 第 4 章文化 第 5 章付録・資料となっている。B5 判 97 頁。

久保有朋『花街建築に関する分布の変遷及びまちづくりの経緯—八王子市中町を対象として—』2014 年

本書は、新潟大学工学部建築学科建築学コース都市計画研究室の久保有朋さんの平成 25 年度卒業論文である。指導教員は、岡崎篤行教授。1 章 研究の背景と目的 2 章 対象地及び全国の花街の概要 3 章 花街の形成過程及び花街建築に関する分布の変遷 4 章 花街の継承に係るまちづくりの経緯 5 章 景観の現状 6 章 結論 付録。A4 判、125 頁。

犬飼康祐『道祖神 サイノカミ みてある記』2003 年 私家版

昭和 53 年 1 月 8 日 秋川市・日の出町、昭和 54 年 1 月 15 日 秋川市平井川・日野市万願寺、昭和 57 年 1 月 15 日 八王子市北野町北野天神社、日野市下田・万願寺、昭和 61 年 1 月 15 日 廿里町・東浅川町、平成 2 年 1 月 3・13 日・2 月 12・18・24 日・3 月 17 日 町田市、平成 4 年 1 月 11 日 秋川市 平井川、平成 7 年 1 月 14 日 山梨県牧丘町、平成 8 年 1 月 14 日 山梨県西桂町、平成 11 年 1 月 13 日 八王子市上恩方町上案下・川井野、平成 13 年 1 月 14 日 神奈川県秦野市、平成 14 年 1 月 13 日 あきる野市・日の出町、平成 15 年 1 月 13・14 日 町田市上小山田町・下小山田町・図師町の探訪記。B5 判、140 頁。

犬飼康祐『道祖神 サイノカミ みてある記 その2』2008 年 私家版

平成 16 年 日野市宮・第一日野方・下田 神奈川県大磯町、平成 17 年（2005）神奈川県秦野市菖蒲・小原地蔵堂・日野市豊田、平成 18 年 川崎市多摩区登戸 中部町会川原支部、平成 19 年 神奈川県山北町 旧山北町地区・日野市第一日野方・東町、平成 20 年 八王子市台町 富士森浅間神社・八王子市山田町の探訪記。B5 判、163 頁。

八王子市市史編さん

民俗調査のお願い

八王子市は、大正6年（1917）に市制を施行しました。そこで、市制100周年記念事業として『新八王子市史』の編さんをすすめています。将来の八王子市を展望するためには、先人の残した貴重な資料を保存し、活用できる環境を整備する必要があります。

今日、八王子市は大きく変貌しています。そこで、市内の伝統的な生活文化を聞き取り、文字で記録して後世に残すため、八王子市市史編集専門部会の民俗部会で地域の民俗調査を実施しています。何卒、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

◆八王子市市史編集専門部会民俗部会のメンバー◆

- | | | |
|-----------|------------------|-----------------------------------|
| 1. 部会長 | 小川 直之（おがわ なおゆき） | 國學院大學教授 |
| 2. 副部会長 | 津山 正幹（つやま せいかん） | 八王子市文化財保護審議会委員 |
| 3. 部会委員 | 小野寺 節子（おのでら せつこ） | 國學院大學兼任講師・
東京都文化財保護審議会委員 |
| 4. 部会委員 | 加藤 隆志（かとう たかし） | 相模原市立博物館学芸員 |
| 5. 部会委員 | 入江 英弥（いりえ ひでや） | 弘前学院大学准教授 |
| 6. 部会委員 | 宮本 八恵子（みやもと やえこ） | 日本民具学会会員 |
| 7. 専門調査員 | 大藪 裕子（おおやぶ ゆうこ） | 東村山ふるさと歴史館学芸員 |
| 8. 専門調査員 | 神 かほり（じん かほり） | 日本民俗学会会員 |
| 9. 専門調査員 | 美甘 由紀子（みかも ゆきこ） | 八王子市郷土資料館学芸員 |
| 10. 専門調査員 | 乾 賢太郎（いぬい けんたろう） | パルテノン多摩職員 |
| 11. 専門調査員 | 高久 舞（たかひさ まい） | 國學院大學研究開発機構研究開発推進
センター ポスドク研究員 |
| 12. 専門調査員 | 三代 綾（みしろ あや） | 國學院大學大学院生 |
| 13. 専門調査員 | 波田尚大（はだ なおひろ） | 國學院大學大学院生 |
| 14. 調査員 | 水谷啓太（みずたに けいた） | 早稲田大学大学院生 |

このほか、八王子市市史編さん室の職員が調査協力をお願いしたり、行事を拝見させていただいたり、資料を拝借しに伺ったりすることもございます。

<問い合わせ先>八王子市 **市史編さん室**

〒193-0943 八王子市寺田町1455番地3

電話 042-666-1511 / FAX 042-666-1512

E-mail b420000@city.hachioji.tokyo.jp

ホームページ <http://www.city.hachioji.tokyo.jp/seisaku/13570/index.html>